

医療法人徳洲会 岸和田徳洲会病院 内視鏡センター

【住所】大阪府岸和田市加守町4-27-1 【病院長】東上 震一 先生 【病床数】341床

【内視鏡検査・治療総数】10,716件(平成22年度) 上部内視鏡検査 6,382件、下部内視鏡検査 3,835件、ERCP 127件、ESD 261件(上部 170件、下部 91件)、他 【保有スコープ本数】上部用 13本、下部用 10本、十二指腸用 2本、小腸用 1本、その他(気管支鏡、超音波内視鏡など) 2本

【スタッフ】医師 12名(常勤 9名、非常勤 3名)、看護師 12名、内視鏡技師 4名、他(事務、洗浄員など) 4名



グループの理念である 離島への医療支援を通じて 真の医療人を育てる

南大阪地区救急医療の要として 年間6,000台を超える救急搬送に対応

岸和田徳洲会病院は、徳洲会グループ3番目の病院として昭和52年5月に開設されました。24時間体制の救急医療に積極的に取り組み、地域に信頼される中核病院として発展してきました。特に、救急受け入れができる医療機関が少ない南大阪地区においては救急医療の最後の砦として機能しており、年間6,000台を超える救急搬送があります。1日の外来患者数は1,000名を超え、そのうちの40%以上が特殊検査や処置を必要とする、近隣施設からの紹介患者が占めています。このような施設背景から、内視鏡センターでも吐下血に対する内視鏡止血や急性胆管炎に対する緊急ERCPなどの緊急内視鏡にも数多く対応しています。



消化器内科部長 内視鏡センター長
尾野 亘 先生



井上 太郎 先生

離島への医療支援はグループの理念 医師として最も大切なことが学べる

徳洲会グループは、創設以来「どんな地域でも最先端の医療が受けられる暮らしを提供する」ことをグループ全体の理念の一つとして掲げており、離島・僻地への医療支援を積極的に行っています。内視鏡センターではこの理念を実践するため、9名の常勤医師を毎月1週間程度、交代で応援診療に派遣しています。消化器内科部長で内視鏡センター長を務められる尾野亘先生は、「医師を派遣することで常に2名分のマンパワーが欠けた状態で診療を行うこととなりますが、残った医師やスタッフも自分が頑張らなければと前向きに仕事に取り組んでくれています。また、院内では上司の指示のもとで介助に回る機会の多い若手医師も、派遣先では必然的に自らが考え、決断して診療を行うこととなります。自分が勉強したことを実践し、そして実際に患者さんやスタッフに喜んでもらえる、こうした経験は本人を医師として大きく成長させてくれます。また、自然あふれる環境で精神的にもリフレッシュしているようです」と、尾野先生は笑顔でお話になりました。同センターに勤務される井上太郎先生にもお話を伺ったところ、「普段は消化器内科医として他の診療科と連携しながら1人の患者様の治療にあたっていますが、離島での応援診療中は、あらゆる疾患に対応する総合内科医という立場で患者様に接することになります。場合によっては外科的な見地から判断する必要もあり、疾患についてより深く掘り下げて考えられる良い機会になっていると思います」とコメントされました。応援診療には看護師等のコメディカルスタッフも同行し、物品の調達や現地看護師への指導も担当しているそうです。

▶ ページへつづく



内視鏡センター単独でISO認証取得 その取り組みがチームの一体感を生む

内視鏡センターは2010年に単独でISO9001-2008の認証を受けました。取得に向けてリーダーシップを発揮された尾野先生は、「限られた陣容で常に高度かつ均質な医療サービスを提供することが求められる現在、誰が行っても確実に一定の結果が期待できるような業務の標準化は、リスクマネジメントの観点からも重要です。ISOでは改善点の洗い出しと改善策の設定だけでなく、それを実践した結果を評価するところまで求められます。つまり、評価してさらに改善すべき点が見つければまた目標を設定する必要が生じ、このサイクルが継続的になります。また、目標・実践・評価の流れを明確にすることで、スタッフ全員の意識を常に高く保つことができます。そういった意味で、ISOは我々の業務効率や質的向上のための目標として設定するのに適していると考えました」と、認証取得のきっかけについてお話をいただきました。

しかし、センター全体で認証取得を目指すためには、医師だけでなく内視鏡診療に関わるあらゆる領域のスタッフがアイデアを持ち寄り、同じ目標に向かって一丸となる必要がありました。看護師長の横田なほ子さんも、「この取り組みを通じて率直に意見を交換するうちに、以前より医師とスタッフの距離が縮まったと感じる」と話しています。尾野先生とともに尽力された井上先生は、「どうすれば医療サービスを向上できるかを考えるうちに、患者さんの視点で物事を考えるようになりました。今では、医師として診療を行うだけでなく、患者さんに満足していただけるためには内視鏡センターはどうあるべきなのかを常に意識しています。症例数や治療実績だけでは評価されない職場に勤務していることは、自分の視野を広げることができるし、自信にも繋がっていると思います」とおっしゃっています。

大腸ESDは全国有数の症例数 医師を支えるスタッフの高い意識

岸和田徳洲会病院内視鏡センターはESDの治療実績で全国有数の施設であり、特に先進医療に位置づけられている大腸ESDにおいては年間約100例の症例数を誇ります。このような高度先進医療を支えるため、看護スタッフは月に2回勉強会を開催し、手技の手順や介助のコツ、処置具の使用方法などを学習しているそうです。横田看護師長は、「先生方に手技に集中していただけるよう、

スタッフに対する要望を吸い上げ共有しています。最新の内視鏡診療を理解し、技術を習得することはもちろん大切ですが、私たち看護師は患者様に一番近い立場として、患者様が安心して検査や治療を受けていただけるよう配慮することが務めです。患者様が何か不安に思っていることはないか、常に細やかな気配りができるよう徹底しています」とお話しになり、こうしたスタッフの意識の高さが、医師が安心して高度な手技に取り組める環境を作っていることが伺えました。

グループ内にEndoクラブを発足 最先端の内視鏡診療が習得できる研修システム

2010年4月、尾野先生は自らが発起人となって徳洲会グループ内に「Endoクラブ」という部会を立ち上げました。「Endoクラブ」では、年に一度総会を開き、それぞれの施設から研究発表を行って情報交換に務めています。また、後期研修医の教育を連携して行っており、札幌東徳洲会病院のIBDセンターではIBDを、茅ヶ崎徳洲会病院ではERCP関連手技を、福岡徳洲会病院では大腸内視鏡の挿入法を、そして岸和田徳洲会病院内視鏡センターではESDを専門とし、最先端の技術が習得できる環境を整えています。4施設全てローテーションで回るか、希望する分野だけ研修するかは研修医の希望で選択できるそうです。尾野先生は、「以前から症例見学などの交流が盛んだだったので、より連携が取りやすいように部会として発足しました。徳洲会グループという組織は、とにかく前向きな活動や提案に対して全く制限がないのが特徴で、また実現までのスピードも速いです。そういった意味では、やる気のある者にとっては働きやすい環境だと言えるでしょう。グループ内だけでなく、近隣施設の若手医師を対象としたESDライブや、開業医の先生方を対象とした症例発表会なども積極的に行って地域連携に力を入れています。今年の秋には内視鏡センターの改装も予定しているので、今後はそうした活動もより大きな規模で行えると、楽しみにしています」とお話をいただきました。尾野先生を始め内視鏡センターの皆さんのお話や様子から、個人の成長を応援する温かさと、また全員で課題を克服したことによる自信が伺え、こうした雰囲気が多忙な中でも向上心を育む環境を作っているような印象を受けました。



看護師長
横田 なほ子 さん



内視鏡診療の様子



内視鏡センターのみなさん